Osaka University Knowledge Archive

Title	契沖を憶ふ
Author(s)	高木, 市之助
Citation	語文. 1951, 3, p. 12-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68377
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

契沖を憶ふ

高木市之助

契沖の文学研究、語学研究、注釈作業等について正面から論究することは、本書所収の他の諸稿で十分に尽されて居る事と思はれるので、私は今こゝでかうしたとりとめもない雑文を書きつゞつて私なりに責めを果したいと思ふ。

契沖が長流に贈つたと伝へられる

われをしる人はきみのみきみをしる人もあまたはあらじとぞ思ふ

といふ歌は表面は勿論長流との交情を誇示した楽しさうな歌であるけれども、裏がへしてみると、そこには長流以外には自分を知つてくれる者が無いといふ嘆きがさみしくなげかれてゐる。契沖を知るといふことはなるほど当時の交友の間ではもちろん、今日専門に契沖を研究してゐる人々にとつても中々むつかしい事であり、そうしてそのやうな彼をほんたうに知ることこそ実は学問をほんたうに知る事でなくてはならないのではないかと、近頃になつて私はよく思ふ。

一般に言つて、吾々はよく或る人物を知る為に、その人物の主義といふか主張といふか、もつと直接には或る身がまへといつたやうなものを手がゝりにする。例へば、国学の謂ゆる「大人」達にしても、春満、宣長、篤胤などと考へて行くと、そこに国学者としては国学展開の一系列があるだけであらうが、同時に他方、春満は春満なりに、乃至篤胤は篤胤なりにそれぞれ身構へをしてゐる。だから吾々はさうした身がまへを一応心得て置きさへすれば、春満にしても篤胤にしても或程度迄分るし、分りさへすればそれを基礎にして批判の道がおのづから拓けて行くといふものであらう。ところがこれには稀に例外があつて、全然そうした身がまへをしない人がある。この場合吾々はその人を知る手がゝりが無い為にひどくもてあますことになり勝ちである。契沖は謂はゞこのやうな極めて稀れな例外の一人であつて、それが彼をして長流に向つて「われを知る人は君のみ」と嘆かしめた嘆きの泉なのではないか。

といつただけでは筆者の独合点になつてしまひさうだから、あへて多少の蛇足を加へるなら——例へば彼の百人一首改観抄が宣長に向学の志をあふつた事は有名であり、実際そこには「旧注」に対する鮮やかな抵抗があつて、その意味で契沖に「文芸復興」的役割を認めようとする考へ方は決して不当ではないと思はれるが、それにも係らず「改観抄」には実は何の身構へもない。この点よく江戸で同じ役割を演じたと言はれる戸田茂睡と比較すれば分ることであるが、茂睡にはどこかかう肩を聳やかしてゐるやうな身構が感ぜられ

るが契沖にはそれが無い。又彼の生涯作である万葉代匠記についてみても、同じ万葉学者である鹿持雅澄の古義と比べてみれば分ることであるが、古義はあのやうな殆ど純粋に客観的な注釈作業であるにも係らず、そこにはやはり彼の或る身構へを感じさせると言つてはまちがひであらうか。代匠記は万葉学史上この古義に対立するほどの画期的な大著であつたにも係らず、代匠記には吾々が古義に感じたやうな身構へを感ずる事は出来ないであらう。

和字正濫抄のやうな語学書にしても、そこに些の身構へが感ぜられないのは、一つには語学といふ学問の為でもあるが、語学者の中でも新井白石とか富士谷成章とかはつきり身構へをしてゐる人々が少くない事を思ふと、この事実も亦、契沖の語学の一つの性格だと言へなくはないであらう。つまり契沖は、あのやうに所謂「旧説」を破壊したり、新説の先頭を切つたりして、近世初頭の、真に偉大な変革者であつたにも係らず、さうした人達に誰よりも一番はつきり感ぜられる筈の「身構へ」を少しも持つてはゐなかつたと言ひ得るであらう。その意味で彼は全く例外的な存在だつたのだが、これは一体何事であらうか。

卑見に随へば、この事実を説明する為にはどうしても吾々は、彼の高度の知性を問題にしなくてはならないのではないか。彼が十三才かで仏門に帰し、一世の高徳の殊寵を得たといふ事を事実とすれば、それはよくある、早く父母を喪つたところから無常を痛感して世を逃れ去つたといふやうな純粋に信仰や悟道に直結する宗教的な出来事ではなくて、むしろ、あの四才かで、数日の中に小倉百人一首を暗誦したなどと語られる、彼の高度の知性が高く買はれたといふ事でしかなかつたのではないか。そこに吾々は契沖の堅固な信心や不壊の苦行といつたものを認めない訳ではないが、彼の仏門生活を非凡ならしめたものはやはり、彼がその生活に於て最高度に発揮し得た知性では無かつたか。さうした消息はそのまゝ移して彼の俗生活即ち学者生活にも適用出来ることであつて、即ち彼が悉曇の学によつて語学の上に大きな足あとを残し得た事も、彼にとつてはさうした知性を満足させた事であつたらうし、彼の万葉集研究の大事業も、卒直に言つて差支ないならば、彼が特に万葉文学に魅了された為に思ひ立たれたといふよりもむしろ、この未開拓の原野に如何に多くの未知未墾の処女地があるかに思ひを附した彼が、その高度の知性によつて鍬を入れて行かうとする、謂はゞ知的な欲求に基づくと解すべきであらう。かう言つてしまへば万葉文芸の探求者として彼の適格が或る程度疑はれるかも知れないのであるが、彼の知性はそのやうに冷徹氷のやうなものでは無かつたらしい。代匠記の殊に初稿本を読めば分るやうに、彼の情感は誠に豊かであり、彼の感性も亦決して鈍重ではなかつたので、この点後代の専門の万葉学者、例へば前掲の雅澄や、明治の木村正辞などに比べて勝るとも劣らない。唯契沖の偉さは、さうした情感や感性やその他この大文学を解く為に必要なすべての資格が超高度の知性によつて見事に統一されてゐるといふ事である。代匠記といふ注釈に於て契沖がよく達成し得た一番偉大な、そして一番積極的な仕事は彼が情熱や意欲ではなく、却つてその冷静卓抜な知性を武器として、中世的な伝統を大き破壊して彼自身の謂はゞ近世的な学問をうち建てた事であらう。由来知性は憶病なものであるが、彼の知性は彼の情感や感性や乃至意欲のよき統一者であるだけに、むしろ敢然として彼をこのような建設者たらしめたのである。

つまり彼は、結果から言つて、俗衆や時流に抗して起ち上つた一英雄であつたが、しかもそこには、直接の情熱や意欲による喧燥が全く無く、彼は唯まことに物静かにそこに立つてゐるのである。その意味に於て、彼こそは多分真淵や宣長よりも、否、近世の学界の誰よりも、もつと純粋に学者だつたのであらう。現在の社会がほしがつてゐる人物はいくらでもあるが、中でも特にほしがつてゐる——といふか、欠如してゐるといふか——のは、かうした契沖型の学者では無からうか。彼の二百五十年忌を迎へるに際して、特に彼を憶ふ所以である。

——二六・四・二五——

契沖阿闍梨　円珠庵再建の趣旨

大阪市における史蹟として、文部省から指定されている契沖の旧住円珠庵は、さきに爆撃の災厄を蒙り、彼の住持した十一面観音堂と共に鳥有に帰し、契沖墳墓の石標のみが燐土瓦礫に埋まれて残存、見る影もなき悲惨な情景を呈している。

静岡県には賀茂真淵の県居神社あり、三重県には本居宣長の本居神社あり、松坂のその住宅は鄭重に保存されているのに、その先駆者、契沖に至つては、住宅のみが円珠庵として史蹟に指定された外殆んど世に顧みられず、今やそれさえ焼亡し、遺蹟は湮滅せんとする有様である。

大阪国文談話会は、契沖二百五十年忌の今年を以て、その復興を発念した円珠庵再建後援会に積極的協力を決定し、契沖生前の画像を祀り、幸に災厄を免れた契沖自筆の般若心経及び書巻五十余部百冊を納めて遺霊を慰め、あわせて真理探究の事蹟を永遠に記念せんとするのであるが、それが維持の一方法としては、庵内二室を整備して学術文芸の小集会場に提供し、永く故人の遺志を継承せしめんと欲するものである。

こゝに契沖の功績を尊重し、また余沢を受けた同志に呼びかけて、広く寄捨を勧進し、復興の資としたく、各位におかれては微意の存する所を諒とせられ、何分の御賛助たまわらんことを切に懇願する次第である。

募金募集方法

一、寄附は一口二百円（一口以上随意）
二、寄附日限は本年九月末
三、寄附金届先　大阪市住吉区帝塚山東三丁目
　　大阪女子大学　平林治徳
四、資金使途は実行委員一任のこと。
五、会計報告は事業完成後、寄附者全部に対して行う。